
我が家の妹。

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家の妹。

【Nコード】

N9193V

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

我が家には奇妙な生き物（他人から見たら家族全員変人に見られることが多い）がいる。——それは妹。そんな妹の生態系を観察、そして気まぐれに日記を書くことにした。もちろん不定期。思い出したら書きます。ものすごく、首を長くして待ってもらえたら……いいのだろうか？

我が家の家族構成（前書き）

登場人物紹介。ネタバレなし。飛ばしても支障ありません。

我が家の家族構成

我が家の家族構成

私（二十歳）

本編の主人公。彼女の視点から物語は展開される。
自他共に認める変人。外面は悪く、友人も癖が強い人が多い。その上、数も少ない。家族に対しては、一歩引いた対応をする。食べるのが家族で一番遅い。

妹（十八歳）

私の観察対象者。姉の事を変人と認識している。
本編では触れられないが、胸がでかい事をコンプレックスとしている（家族はみんな触れない）。

楽器が好き。勉強嫌い。大喰らい。

兄（二十二歳）

私の兄。ちよつとキレやすい。一か所に留まるのが嫌いで、外出している事が多い。
ゲームが好きで、よくゲーセンに行く。二十時までに夕飯が作られないと、母に催促する。

父

私の父。私からの信用は薄い。妹からは邪魔者として扱われる事が多い。

母

私の母。ストレスが多い。そのせいか、キレやすい時がある。私はその都度部屋へ逃げている。兄は外に逃げる。妹は犠牲になる。

その他

叔母

母の妹。

甘え上手。

ぐたらな妹さま（前書き）

フィクションです。

ぐたらな妹さま

私には妹がいる。もちろん、血は繋がっています。

中学、高校（しかも私立！）と私と同じ学校でした。私のせいか、それとも妹個人のせいかわかりませんが、高校の時はその性格や態度から（いい意味で）有名人だった妹。別にすごく美人とか、そういうのでは当然ない。

ついでに言えば、よく漫画やアニメやライトノベルで登場するアレだ。

だがひとつ、断固として言わせてもらう。

妹というのは、漫画やアニメのように可愛くなどない。断じて。

別に妹好きの人の思想をぶち壊そうとか、そういうのではなく。ただ「幻想持ちすぎると後で危険」ということを主張しておきたい。

まあ、そんなことで、我が家の妹さまの観察を本日より始めようと思う。

当然ストーカーをするわけではない。家にいる時に観察して、日記をつけるだけだ。

もちろん、本人には無許可で。

*月*日（何日か忘れた。どちらにしても、私の日付感覚はあいまい）

高校を卒業した妹さまは一日中、家でのんびりしていた様子。いや、別にのんびりしている事に問題はありませんとも。問題は運動量。それに対する食事の摂取量にこそ、ございます。

「あ、おかえり」
「ただいま」

妹さまは寝巻姿のまままで一日を過ごしていたようだ。別に私自身がそうだから問題は特にない（突っ込まれたい方はご自由にどうぞ）。

私は部屋へと荷物を置き、台所へと向かう。

さて、母に頼まれていたご飯でも炊こうとしますか。今日は（明日の妹の昼の分のご飯を考え）四合ほど炊こうかの。

炊飯器をあける。

「……………」

あれ？ おかしいな。

「ねえ！ 今日って二人分くらいご飯、残ってなかったっけ？」

「え？ 全部食べたよ」

………… えつと、全部？

私は耳を疑いましたとも。

ちなみに二人分といっても、少し多めの二人分である。三人分には届かない程度の二人分。

あれ？

両親の寝室へと向かうと、横になって本を読んでいる妹を発見。その本の内容は、…… あえて言及いたしますまい。

「………… なに読んでんの」

ごめんなさい。思わず聞いていました。むしろ聞かずにはおりませんでした。

妹は本から顔をあげて、私を見る。

「……えへっ」

ちよおおおおおと待ったあい！

ちなみに、我が家の母は腐女子である。おそろしいこと（ある意味尊敬できるレベル）に、ベッドの周りは例の本がズラリ、なんて可愛らしいものではなく、まさしく山のように積まれているのだ。当然ひとつではなく、複数。わざわざ数えるほど野暮ではない（ちよっと違う）。

家計がどんなに苦しくなろうとも「病気だからやめられないの」と母は笑う。

まあ、それは別に置いておく（だって私が小学二年生の時から存在してた。ちよっと読んだことがある。当時は理解できなかった。ちなみに私の興味の対象外）。病気なら仕方あるまい。

妹は現在、十八歳。

ぴっちぴちの女子高生（古い）。

別に知り合いに腐女子がいないわけではない（だが私にそういう話は振られた事はない。でもなんとなくニュアンスで察知します。一生懸命隠してるのに、ごめんなさい）。

だから別にイカンとは言わん。

だが、「えへっ」はないだろ！「えへっ」は！

しかもなんか一生懸命隠してるし（しかもバレバレ）。おまえは思春期の男子か！

思わず深いため息。

しかもこれが一回目ではなかったり。懲りずによくも、まあ、やることで？

おつといけない。本題を忘れる所だった。

「ご飯、けっこう残ってなかった？」

「あゝ……ちよっと多くなって思ったけど、全部さらえた方がいいかなって」

なるほど。炊飯器の事情を鑑みての決断のようだ。

……………

いやいやいやいや！

「食いすぎだろ！」

すると妹は再び「えへ♪」と笑った。

ちなみにその旨は母に報告しておいた。すると母は烈火の如く怒り狂った。

「あんた、一日中ごろごろしているんだから、ちよっとは控えなさい！」

全面的に合意させていただきます！

ちなみに、それに対する妹の答えは、「えゝ、だってお腹すくんだもん」でした。

さらに余談になるが、母が帰ってくる音（車の閉める音とか）が

聞こえてくると、妹は脱兎の如く部屋へと逃げ帰るのである。
その機敏な動きを、もっと日常で生かしてくれたまえ。

ぐたらな妹さま（後書き）

妹って、年を重ねるごとに言うことを聞かなくなる。
小さい時はあんなに素直だったのに……

妹さまの相棒（前書き）

楽器を吹いたことのない人には分かりにくい話題かも知れません。

妹さまの相棒

妹さまには相棒がいらっしゃる。

それは銀の輝きを持ち、しなやかな姿を持つ。ただ、打たれ弱いのが欠点である。机の角や壁などにぶつけると、文字通りへこむ。その度に妹さまは「あー！」と悲鳴を発する。確かに、それが何か理解しているのであれば、悲鳴を発するのは道理であった。

*月*日（妹さま高校卒業後）

部屋の襖を開けると、異様な空気が体を包んだ。それと同時に鼻につく臭いを嗅ぐ。別に好きで嗅いだわけではないのだが。

「……くっさ」
思わず呟く。

「え？ そうかな？」

私は急いで部屋の窓を開ける。だが生憎と風の通りはあまりよろしくなかった。足元にある扇風機を点けて強引に部屋の空気を追いだした。

「一度部屋を出れば分かる。本気で臭い。マジで臭い。ほんと勘弁して」

「そこまで言う？」

妹は銀の輝きを持つ楽器を抱きかかえていた。

その名をユーフォニウムニウムという。低音楽器（中音とも認識される）だ。ちなみにお値段、おおよそ70万程度。母が妹の楽器

を買ったと聞いたときは目を剥いたものだ。

妹は再びマウスピースに口を当てて息を吹き込む。ポー、とまっすぐに澄んだ音が部屋に響いた。ゆっくりのテンポで2拍伸ばし、そこから半音下がり、4拍伸ばす。吹きなおしてその音からさらに半音下がっていく。ソノリテと呼ばれる練習法だ。途中でぽこぽこ、という奇妙な音が混じる。

「うえ」

マウスピースから口を離し、唇をぶー、と鳴らす。

抱いているユーフォoniumから大きく曲がった管を抜きとる。そしてその管の中身をゴミ箱に向けて落とした。

私はそれを見て目を剥いた。

「いやいやいや、ちょっと待て」
「ん？」

妹は管から溜まっていた唾（正確には違うのだが……）を捨て終えて、それを再び本体に装着した。

「におうからやめて。それにここは学校じゃないから。」

私と妹の通っていた学校では金管楽器は唾皿と呼ばれる、銀の受け皿に唾を捨てていた。それが癖になっているのか、ごく稀にゴミ箱を唾皿として利用する人もいる。妹はその一人だった。

「そうかな？ 大丈夫じゃない？」

「虫がわくのはご免だよ」

私は深いため息をつく。

「それに、すごく臭うと思うから、本当にやめて」

そこまで言つて、ようやく妹はタオルに唾を押し付けた。他の管も同様にタオルに捨てる。

私は心の中で安堵すた。

（ゴミを捨てるこっちの身にもなってくれ）

あの状態でゴミを捨てる、中に入っているゴミがゴミ箱にへばりついている可能性もあるから余計に嫌だった。触りたくないしね。

妹は再び吹き始めた。

しばらくして、兄が帰ってきた。近くの襖が開いた音がして、再び閉まる。妹は息継ぎをして、再び楽器に息を入れた。

今度は音階の上り下りの練習をしている。

ポポポポポポポポ・ポポポポポポポ
ポポポポポポポポポポポポポポポ

「うるさい！」

兄の怒鳴り声が聞こえる。

妹はそれでもやめない。

ポポポポポポポポ……

「うるせえ！！」

まだ夕方ではあるが、神経質な所のある兄は気に食わないらしい。おまけに壁が薄くて隣の部屋まで筒抜けだ。まあ、大して広くないのでユーフォの音で部屋がいっぱいになってしまふ所もあるのだ。

が。

「おい」

これ以上兄がうるさくなる前に妹を諷める。

「だめ？」

「近所迷惑だからな」

楽器吹き性の性だ。暇があると吹きたくなる。特に楽器から離れて間もな頃は。

妹は不服そうに唇をぶー、と鳴らした。

妹さまの相棒（後書き）

おまけに才チなし。

妹さまとテレビ

テレビを製作している人にとっては、やはり視聴者に楽しんでもらうのが嬉しいのだろうか、とたまに考える。

予想通りの反応をする視聴者に、製作者は「してやったり」とほくそ笑むのだろうか。そういう映像を今まで見たことがないから、ただの予想だけど。

だとしたら、ここに製作者の喜びそうな視聴者がいる。まさに私の隣にいる。

いい加減になれるよ、とは決して言わないし、見ていて面白いから言えない。

*月*日

我が家の夕食は家族がそろってから食べる事となっている。例外はあるが、基本はそうだ。ご家庭によつては「食事中はテレビ禁止」という所もあるだろうが、私の所は特にそういった所はなく、自由にテレビを見ている。——まあ、面白いものがない時は兄が消してしまうのだが。

視界の端で何かがびく、と動いた。

横を見ると箸を持った状態で固まっている妹がいる。私はまたか、と食事を再開した。

「手が止まってるよ」

言われてようやく妹は硬直していたのに気づいたようだ。箸を動かすが、すぐにまた固まってしまう。

食べようと動かしていたためか、今度は口まで開いてしまっている。おいおい。

「うおあ」

びく、と肩を震わして妹は奇妙な声を上げた。
うん。良い反応だと思うけど、ご飯中は遠慮してほしいな。気になるから。

妹はホラーなどでよくある唐突に現れるものに弱い。ホラーに限らず、唐突に現れるもの全般に弱いと言っても過言ではない。映画館でもそんな反応をするのだから、あまり一緒に行きたくない。視界に入って気になるから。

「気になるなら見なければいいのに」

「……………」

私の咳きは完全に黙殺された。というより、聞いていない。妹は現在、画面に釘付けである。

ついでに言っと、私はわりと意地悪だったりした。

「どうやら気になって手が動いてないみたいだから、テレビ消した方がいんじゃない」

思い立ったが吉日、とばかりに私はテレビの電源を消してしまふ。

「あーっ！」

妹は悲鳴を上げるが私にはどこ吹く風だ。

「なんで消しちゃうの!？」

「いやー、だって気になってご飯が食べられないみたいだったから。」

米が固くなっちゃうよ」

ちなみに、妹は米が最後に残る。野菜とおかずはすぐになくなるのに米だけが残る。不思議だ。一緒に食べた方がおいしいのに。人それぞれだから、特に言わないけど。

「ちゃんと食べるなら点けるけど」

「食べてるよ!」

食べてたら言わないって。

このまま点けずにいると後がうるさいのでテレビを点ける。そして再び最初に戻るのだった。

学習能力って知ってるのかな? と思わずにはいられない。

それで再びテレビを消し、これを何度か繰り返すと妹もさすがに学ぶ。約三回ほど行う必要があるのだが、二回までに留めるのが常だ。なぜなら――

「いい加減にきなさい!」

と、母に私が怒られるためである。機嫌が悪い時は危険なので、そういう日はやらないけど。

そうになると私はご飯中ずっと、妹のリアクションに悩まされる事となる。まあ、芸の一つとして横目で観察して楽しいからいいけど。

こうして我が家の食卓は進んでいくのであった。

妹さまとテレビ（後書き）

なんで固まるのかな。それが不思議だったり。

妹さまの寢床（前書き）

ものすごく短いです。暇つぶしにどうぞ。

妹さまの寢床

我が家の姉妹の寢床は二段ベッドである。上は姉である私。下は妹だ。ちなみにこの上下設定はとある事情により、変更が不可であったりする。理由は別の機会にするとして。

我が家のベッドは板があつて、その上に敷布団をひく形式となっている。まあ、よくある種類の型だろう。そこは別に問題はない。

問題は、敷布団とベッドの間にこそある。

*月*日

今日は快晴。とても天気が良い。母も本日は仕事が休みのようで、朝からぐーたらしているかと思いきや。

「今日、布団干すから」

なんですと！

私は思わず跳ね起きた。

「嫌だよ」

本日、件の妹さまは所用により、出掛けております。

ちっ、うまい事逃げ出しおつて。

内心で毒づいてしまつたり。

ちなみに兄は母が宣言するや否や「ゲーセン行ってくる」と家を出て行ってしまっている。逃げ足の速い兄だ。

——で、逃げ遅れた私かというと。

「別にいいんじゃない？ 干さなくて。私のは干さなくていいよ」

ちなみに、この前回から約半年以上干されなかったのは、記憶の奥底に仕舞い込んでおく。いいんだよ、黴は生えてないから。

「いいじゃなくて、干すの」

母は問答無用で妹の布団を引っぺがしてゆく。その時、何かがいくつか落下する音がした。気になって下を眺めてみる。

わーお。なに、私の妹ってハムスター的な習性をもってたわけ？

布で包まれた板の上に落ちたのは、母の本。言及するまでもなく、例の本である。

母も呆れたように本たちを見ていた。

「ないと思ったら……」

もつと早い段階で気づけよ。それよりも妹よ、隠すにはあまりにも杜撰すぎるのでは？ まあ、妹の物事を隠すスキルのなさには、ある意味感心するが。

もちろん、例の本たちは本拠地へと引き上げられていく。ちなみに、このやりとりは今回だけではない。何事においても学習能力の低い妹だ。

「あんたも手伝いなさいよ」

「やだ」

「休みの日くらい、家の事手伝いなさい！」

大声で怒鳴られる。短気だな、と私はベッドから降りて手伝う事になるのだった。

ちなみに帰還した妹はというと、母に怒られましたとぞ。

妹さまの寢床（後書き）

コメディーですらないような気が……
何も考えずに読むには丁度いいかもしれません。

妹さまとおやつ

皆様のご家庭ではお菓子が常備されていますか？

我が家ではされていません。否、できません。

これは我が家で行われる熾烈な争い的一幕である。

*月*日

今日は久しぶりにおやつがある。

私はいつもより気分良く台所に向かう。

我が家でのおやつは早い者勝ちが相場である。例えそれがお徳用のお菓子であっても、その日の内になくなる事がざらだ。なので、お菓子はある内にあるだけ食べる、などという勿体ない状況にあるのが現状だった。

おっかし、おっかし。

台所にぶら下げられているビニール袋を覗く。そこにはファミリー用の子袋に分けられているお菓子があった。私はそれをビニール袋の中から袋ごと取り出す。

そこで私は違和感を覚えた。

「……？」

持ち上げた袋が妙に軽い。中を覗くとそこには無残な姿（二〇袋入りなのにもかかわらず、四袋しか残っていない）が。

なんじゃこりゃああああ！

思わず固まってしまった。

落ち着け、私。落ち着くんだ、私。
混乱している自分を必死になだめる。

これまでの事を整理してみよう。

- ・私の手に持つお菓子は昨夜、母が購入してきた物である。
- ・朝見た時は確かに存在していた（お楽しみだもんね！）。
- ・そして妹は家にいる（なにもない日らしい）。

ここから導き出される解は一つ。

「妹よ」

両親の寝室で寝転がっている妹を見ながら言う。妹は母の例の本に夢中のご様子。返事はもとより期待していない。

「これ、食べた？」

妹はようやく顔を上げる。袋を見た瞬間、その顔がにやりと歪んだ。

「食べたんだ？」

「……えへっ」

二度も同じ手は通用せん。

その代わり、私は爆弾を落としてやることにした。

「太るよ」

本のページをめくる手が一瞬止まる。しかし何事もなかったかのように動き出した。

「あんだ、ずっと家にいるじゃん？ 確実に太る路線だね。せめて食べる量減らさないと、本当にやばいよ」

以前、妹は昼には多すぎる量のご飯をお召し上がりになった。そして今回のこの所業。ふむ。ここから導き出される結論と言えば――

「肥えたかったのか。それはすまん。察っせなかった。でも、床がその内抜けるから遠慮してくれ」

「……………」

妹は答えない。

自慢じゃないが、口で妹に負けたことはない（こつは理論が破綻していようと、強引に押し切ること。自分が合っていると認めていればそれでいい）。

「いいもん」

小さく妹は呟いた。

「なにがいいんだ？ ……ま、いつか。お菓子食べよ」

言った瞬間、妹は跳ね起きる。まったく、その反射神経を別の所で使ってくれ。

「あたしも食べる！」

「却下」

私の即答に妹は不満をこぼす。

「えー！ なんで!？」

「食べたんでしょ？」

言外に「なら、食べる必要性はないんじゃない？」と言ったようなものだ。しかし妹はというと、

「それはそれ、これはこれだよ」

開き直りやがった。当然、却下だ。

「いやいや、駄目だし。残りはすべて私がいただく」

問答無用ですべて食べ尽くす。

妹は恨めしげに私を睨んでいた。そんなものはどこ吹く風だが。

「ただいま」

しばらくして母が帰還する。

荷物を玄関あたりに置き、台所までやってくる。そしてお菓子の入っていたビニール袋を覗くが、

「あれ、お菓子は？」

「ない」

直球な回答。わかりやすいだろう（ちよつと得意気）。

「なに？ もう食べちゃったの？」

苛立ちを隠すことなく母は問い詰める。

「ほとんどはあいつだよ」

私は妹を示した。妹はというと、覗いてきた母に対し「えへつ」と笑みを浮かべる。

当然、母は激怒した。

「あんたねえ、いい加減にしないと豚になるよ！」

ふむ、今日も我が家は平穏だ。

とぼつちりを受けないように、私は自室にそそくさと非難するのであった。

妹さまとおやつ（後書き）

煎餅が無性に食べたい……
かりん糖でも可。

妹さまと動画サイト（前書き）

今回は長い。珍しく長い。

妹さまと動画サイト

動画サイト。

それは様々な人が動画を投稿しているサイトである。我が家でもそれなりの頻度で利用している。主に視聴しているだけで、投稿はしないが。

何気なく見ていると、あつという間に時間が過ぎてしまう。これだけは注意する必要があった。

その注意を怠るとどうなるか。

特に実験するつもりはなかったが、それを目撃（観察）することになってしまった。

*月*日

朝起きて、なんとなく騒々しかった。

我が家の人員は約一名（兄）を除いて、そろって低血圧。平日はともかく、休日は起きるのが遅い。私など、まさしくその筆頭だ。だが、その日は珍しく早起きした。起きたら8時だった。自慢するほど早い時間でもないか。

騒々しい音は、思っていたよりも近い場所から聞こえていた。

「……………」

半分寝ぼけた状態でベッドの下を覗く。そこには妹がいる。横になってパソコンを開いていた。

パソコンを開いている以外、いつもの事だった。

「……………なに見てるの」

「ん？ アニメ」

そうか、アニメか。なるほど、それならこの騒音も納得。だが――
っただけ解せない事があった。

「なんで朝っぱらから見てるの」
しかも妹にしては珍しく8時にはすでに起きていたのだ。

「ん？ 目が覚めたから。暇だったし」

確かに目が覚めて、やることなかったら暇だね。

「ふうん。ほどほどにね」

私は寝転がって本を読むことにした。今日は特に動く予定がなかったから、朝食は抜く。

昼になり――

「メシ！」

兄が昼を知らせる声を上げる。まるで鶏のようだが、その事を口にした事は一度もない。そんな事をすれば殴られるのは目に見えている。

「ほーい」

私はベッドから降り、妹を見た。

妹は変わらず、動画サイトを見ている。

「ご飯だつてさ」

「うーん、行くー」

気のない返事だ。まあ、来るならいいだろう。

「これ見てから」

――ん？

私は妹のしている動画の再生時間を見る。残り3分ほど残っていた。

——アウトかな。

「だめ。すぐ来い」

「えー」

「すぐ来い」

渋る妹に念押し。そこでようやく、気は進まないようだが妹は了承した。

「早く来い！」

兄の怒鳴る声。短気すぎるだろう。

「行くってば！」

怒鳴り返し、昼食を摂った。

夜になり――

「お前、いつまで見てんの」

妹はまだ、動画サイトを見ていた。

「んー」

誤魔化すように妹は唸る。私は呆れて溜息を吐いた。

「少しは手伝えよ」

その日、私は洗濯を三回ほど干していた。ついでに風呂場を洗い、湯を入れたのも私だ。その間、妹はずっと動画サイトを見ている。なんとなく、ムカつく。

「おーい」

「んー？」

私は気が長い、と思われる事が多い。けれど、本当は短気だ。

——んー？　なんか今の、ムカついた。

「ポチッとな」

「あー！　ちよっ、なんすんの！？」

「ボタン押したただだよ」

何のことはない。電源ボタンを押したただだ。パソコン画面はすぐさまブラックアウトする。

「いやあ、なんだかさー、そのボタンが“押してー”、って言うてる様な気がしたからさ。私は優しい子だからね。お望み通り、押してあげたってわけ」

自分で優しい、と口に出す人ほど信用ならない。私はその筆頭のようだ。

「どう考えても言っていないし！　ウソつくな！」

当然、妹は怒る。短気だなあ（私が仕向けたんだけどね）。

「いや、嘘じゃないから。私には聞こえたんだよ、そのパソコンの声が。“お願いします。押してください、後生ですから”ってな感じで」

嘘だけどー！

「もう！　あっち行ってよ！」

「いや、ここは私の部屋でもあるのだよ」

私はここから移動する気はない。行くならお前がどっかいけ。

「あー！　もう！」

妹はパソコンを抱えてどこかへ行く。まあ、他にパソコンを使えるような場所は台所くらいだが。

案の定、妹は台所へと向かった。台所では母が夕飯を作り始めている。

ふむ、これは逃げるべきか。それとも観察するべきか。

結論として、私は少し離れた所で観察することにした。そして予想通り――

「いつまでやってんのよ!」

ぶちっ、と勢いよく母は電源を消した。

私はそれを観察し続ける。

「あんた朝からずっとパソコンやってるじゃない! 少しは家の事を手伝いなさい!」

妹は小さくなって、不満気に母を見ていた。

「だいたいね、ご飯を作り始めてるんだから手伝いなさい!」

「お母さん、これ配ればいいの?」

私はボウルに盛られていた野菜を示す。

配って、と母は答える。私はボウルを机の上に置いた。

「はいはい、どいてどいてー」

妹にパソコンを押し付け、皿を取り出して野菜を配る。

何らかの作業をしている時、母は基本的に怒りやすい。私はそれを初めから見越していたが、妹は気づいていなかったようだ。

これくらいも読めんようではまだまだ、だな。

などと、思っていたら――

「あんたもだよ!」

「!？」

私もっすか!？

どうやら私も読みは、甘いらしい。

ちなみに、妹は懲りずに未だに一日中動画サイトを見る時もある。とぼつちり食らうから、やめてくれ。

妹さまと動画サイト（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。
まだまだ続きます。ネタが続く限り。

妹さまと争奪戦（前書き）

早い者勝ち。

妹さまと争奪戦

我が家では不定期に熾烈な争奪戦が行われる。

そこに情けなどありはしない。あるのは自分たちの欲のみ。弱肉強食。まさしくその言葉が似合う世界。別に弱いと食べられる訳ではなく、弱いと食べれない。

そしてそれは唐突に起こるのだった。

*月*日

目の前には袋に入ったお菓子がある。

私は周囲を注意深く見回す。――運の良い事に周囲には誰もいない。なんとという僥倖^{まやうじゆう}。私はお菓子の袋を手取る。この際、なるべく音を立てないように注意する必要がある。眠れる獅子を起こしてはならない。実際は寝ていないから、なお性質が悪い。

私はゆっくりと袋の口を開けた。

しかし私の涙ぐましい努力にも関わらず、音が立ってしまう。

しまった！

すでに時は遅し。地響きと共に奴は現れた。

「あれっ！ お姉ちゃん、なに食べてるの！？」

まだ食べていないのに食べてる事になっている。私はお菓子を隠す事を諦め、潔く妹に差し出す。

「まだ食べてない。一緒に食べる？」

「食べる！！」

素早い返答。家の手伝いの返事は異様に遅いくせに、こういう時だけ無駄に早い。

こうしてお菓子争奪戦が始まった。

それは静かに行われる。決して表面には出さない。

我が家では大袋に入っているお菓子は、一つずつ、一個ずつだけ持つていく。これは我が家の規則の大前提である。別に法律や法令でも何でもない。ちなみに、これはマツクのポテトフライでも有効だ。

これを守らない者には、卓を囲んでいる皆から冷たい視線と暴言の嵐を見舞われる事になる。基本的にこれの対象になるのは、もっぱら父だ（父の言い訳……もとい、言い分は「場所が遠い」だそう。ちなみに私も皿までの距離は父と同じである。よって、そんなものは受け付けない）。

「もう少し味わって食べよ」

食べるペースの速い妹を、遠まわしに非難する。しかし妹の食べるペースは変わらない。

「味わってるよ」

こいつ、確信犯だ。

私は冷ややかに妹を見る。しかし妹の視線は獲物から外れない。

……その集中力を、もっと別の所に使えよ。

「いや、だからさ、味わってる様に見えないんだよ」

私はアプローチの変更を余儀なくされた。

「そうかな？」

「そうそう。別にそんな急がなくなっただって、お菓子は逃げていかないよ」

「えー？」

妹は疑いの視線を向ける。

「強いて言うなら、私がおいしく頂くだけだ」

しまった！ 反射で言ってしまった！ 私は馬鹿か！

私は本来、隠し事ができない人種なのだ。考えた事を、良くも悪くも反射的に口に出してしまう事がある。友人から冷たい視線を向けられる事もしばしばあった。

「じゃ、だめ」

当然、妹は拒否する。

くつ、私のためにゆっくり食べるといふ選択肢はないのか！

……………その手があったか。

「別に私はそんな早く食べないから、ゆっくり食べて大丈夫だよ」

「……………」

「ほら、そんなに急いで食べるよりも、ゆっくり味わって食べた方がおいしくない？ どうせ私は食べるの遅いんだし」

私、食べるの家族で一番遅いからね。小さい時はそれでよくお菓子を摂り損ねた。お陰で私は相手の目に入らない場所で食べる、という特殊スキルを習得したのだ。他にも隠れたお菓子を発見するスキルも手に入れている。別に便利でもなんでもないが。

「……………そうかも」

妹は納得したのか、動く手がゆっくりになる。それに私は安堵した。

よかった。これで味わって食べれる。

しかしこの段階ですでに残りの量は半分を切っていたりする。説
得に時間をかけすぎたようだ。
ま、のんびり食べればいいか。

妹さまと争奪戦（後書き）

早い者勝ちといえど、策略を練るのも手だったり。情に訴えるよりも、利を訴えた方が聞いてくれます。もつとも、そんな頭はありませんが……

妹さまと鼻血（前書き）

今回は月だけ書かれています。

妹さまと鼻血

人は興奮すると鼻血が出ると認識している人もいる。でも実際に興奮して鼻血を出している人を、見た事がない。だからアニメや漫画でよくある、あのパターンをどこか信じる事が出来ない。

それに、好きで鼻血を出す人などいるのだろうか。

夏場などの暑い日に鼻血が出てしまう人もいるだろうし、変態¹¹鼻血という方程式は間違っているのではないかと思う。

まあ、別にどうでもいいことなのだが。

8月*日

夏だ。暑い。

私は暑いのが苦手だ。汗は止まることなく流れるし、外に出れば肌はじりじりと焼かれているのがわかる。小さい時は気にせず出ていたものだが、今は無理だ。暑さのあまり、やってられん。

だが、私よりも厄介な体質が傍にいた。

「……大丈夫？」

妹は顔を上にしてティッシュを丸めている。適度な長さに切り、くるくると手慣れた手つきで鼻ポン（鼻に詰めるもの。我が家では鼻ポンと呼ばれる）を作っていく。毎年の事ながら、大変だなと他人事のように眺める。

「んー、平気。ちょっとだけだし」

妹も慣れているせいか、全く気にしていない。

実際、軽く垂れるだけならば可愛いものなのだ。少し前に起きた時など、ゴミ箱の中が血の海になっていた事がある。何事！と思

わずにはおられなかったのは、当然の反応だ。

それに妹は頻繁に鼻血を出す所為か、いつ鼻血が出るのかが分かるようになっていた。たくさん出そうな時は、洗面所にすごい勢いで走っていく。別に興奮したわけではないのに、鼻血が出るのは気の毒に思えた。

「あつ、ティッシュ取って」

見ると、ティッシュ箱の中は空っぽになっていた。今年はなぜか例年になく、ティッシュの消費が激しい。冷房を点けっぱなしで過ごす兄が頻繁に使う所為だが。

私は近くの部屋から持ってきて妹に渡す。

「ありがとー」

こっという時はいつもよりも素直だ。

「パンにチョコレート付け過ぎるから鼻血出るんだよ」

溜息交じりに言うと、そんなことないよ、と妹は反論する。

「違うつて、チョコは関係ないって」

「これまでの経験から、おおいに関係してると思うけど？」

小さい時、チョコを食べるとすぐに妹は鼻血を出していた。そのため、母からは何度も禁止されているが、懲りない。好物であることが原因であった。

「だって、おいしいし」

「おいおい」

そこまで言うなら私は何も言わない。鼻血の処理は妹が自分です

る。被害は妹だけだ（ごく稀に布団も被害を受けている）。好きにしたら、と私は部屋へと戻った。

台所でゲームをしていると、妹が現れる。しばらくそれを眺めているかと思えば、アーモンドを食べ始める。ちなみにこのまま放置しておく、一袋食べきるのは確実だった。

「あんまり食い過ぎるなよー」

「うん」

信用ならない返事だ。私は基本ゲームよりも食い気だが、残念な事にセーブポイントが発見できない。発見できるまでおやつはお預けだ。

しばらくすると、妹が突然立ち上がり、走っていく。

……洗面所に向かったな。

「よく貧血にならないな……」

そこまでして食い気をとるなら、私には何も言えなかった。

妹さまと鼻血（後書き）

これからは投稿するペースが遅くなります。申し訳ありません。

番外その一、我が家の姉。（前書き）

9月8日ゲーム発売！ から浮かんだ内容。
ちなみに妹から見た姉なので、多少受ける印象が変わります。

番外その一、我が家の姉。

あたしには二つ上の姉がいる。そしてその姉は変人だ。

最初は特に気にならなかった。けれど、中学・高校の部活の時に自己紹介をすると必ずと言っていいほど「あの人の妹……」などという反応が必ずある。お陰でよく構ってもらえたけど……

「あの」って何なの？ そんなに姉は有名なのか！？

実際にいろんな先輩に聞いてみると、姉の評価は十人中九人ほどは「変人」、「変わっている」と答えられた。ちなみに、少数派で「癒し系」、「鬱陶しい」もいる（全然反対の評価だよ……）。その中でごく稀（一人だけ）に「私の恋人」という奇特な人がいた。女性だった（ちなみに恋人ではない。姉は毎回適当に追い払っている）。

お姉ちゃん！ いろんな意味で、大丈夫！？

*月*日

今日は朝からお姉ちゃんのテンションがおかしい。なんか異様に機嫌が良くて、鼻歌まで歌いだしそんな感じだ。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「ん？ なんて？」

姉はいつもよりも明るい声で答える。

「いつもよりも機嫌が良いみたいだけど、正直に言っていると気持ち悪いよ」

「は？ なんて？ ま、別にいいけど」

いいのか。お姉ちゃんは気分屋だから良いなら良いけど（たまに倍にして言い返される）。

あたしは姉の気分が良い理由を考える。

姉の機嫌が良い ↓ 何か良い事があった ↓ 彼氏ができた!?

「お姉ちゃん、まさか彼氏ができたの!？」

勢い込んで聞くと、姉は呆れたような視線を向けてきた。

「なんでそうなる」

ちなみに姉の彼氏いない歴は年齢と同じである。そろそろ年齢的に彼氏がいておかしくない(↑ 偏見)。

「え、だって機嫌が良いから」

あたしの言葉に姉は深い溜息を吐く。

「あのね、私が機嫌が良い^{イコール}彼氏ができたって、何でなるわけ? 意味が分かん」

「じゃあ、何で機嫌が良いの？」

あたしが聞くと、姉は無い胸を張り(誇張ではなく、本当にない)にやり、と笑った。

「明日はとうとう待ちに待ったゲームの発売日なんだよ!! これがテンション上がらずにいられるかつ！」

……期待したのが間違이었다。思わず溜息でちゃうよ。

そうだよな。お姉ちゃん、恋愛に興味ないもんね。髪の毛短いと性別が分からなくて、知らない人から本気で不思議そうな顔されるもんね。漫画よりもよっぽど酷い見られ方されてるもんね(まさしく上から下までじっくりと眺められて、その上で更に首を傾げられるって……。見ていて居た堪れない)。

「なに、その大きな溜息」

姉はかすかに眉を顰める。

「いや……、やっぱりお姉ちゃんはお姉ちゃんなんだな、って思ってた……」

「ふーん。意味分かんないけど。まあ、どうでもいいか」
投げやり過ぎない！？ そんなんだから変人扱いされるんだよ。
こうしてあたしは今日も姉を生温かい目で見守っている。当分テ
レビが自由に使えなくなるんだろうな、と思いながら。

そういえば、最近なんだか視線を感じるんだよね。もしかして、
幽霊！？ あたし靈感、ないはずなのに……。今度お姉ちゃんに相
談してみよ。きっと面白い回答をくれるだろうから。
お姉ちゃん。

番外その一、 我が家の姉。（後書き）

おまけ

後日、さつそく聞いてみる事にした。

「お姉ちゃん」

「んー、何？（ゲーム中。画面から視線を外さない）」

「あのさー、最近視線感じるんだけど……」

「ふーん。大変だねー（画面から視線を外さない）」

「ねー、聞いてるー？（なんか、生返事っぽいんだけどー）」

「えー？（やっぱり画面から視線を外さない）」

「ねー（絶対聞いてないよね。この人）」

「ちょ……、あー！ やばいやばい！ いや、やばいつてー！（操作キャラが大ピンチ！ 異様なまでに焦ってるよ……）」

「ねーってばー……（若干諦め）」

「だから、なに？ おっ、よし、いけ！ そこだ！ これでも喰らえ！（白熱しているようだ。当然、画面から視線を外さない）」

「……もういいよ」

「ふーん。あ、そ（やっぱり画面から視線を外さない）」

「……………（こういう所が返事と言われる所以なんだろうな）」

妹さまの勉強法

勉強。

この響きを聞くだけで、なんとなく気力を削^そがれてしまう。それはほとんどの人に共通する事だろう。ごく稀に、「勉強大好き」なる人もいるが、それはごく少数の話だ。

そして勉強の方法は人によって大きく違う。

ただひたすらノートに書く人もいれば、口に出して暗唱しながら覚える人。はたまた、テストの直前に教科書を見るだけの人もいれば、勉強自体をそもそもしない猛者^{もさ}もいる。

しかし、それぞれの時の勉強の姿勢はどのように行っているのだろうか？

今回も、我が家の観察の対象から研究する事にする。

*月*日

テスト。

私はその言葉が大嫌いだ。なぜなら面倒臭いから。

「だいたい、テストなんて資源の無駄！ 紙の無駄！ 環境を破壊するな、資源を大切に、と普段は言っているくせに、なぜ無駄に紙を消費するのか！」

というのはまあ、方便だ。大学に入って筆記試験が少なくなっただけのは、かなり嬉しい。

だからこそ、私は妹の勉強する姿をじっくり見る機会に恵まれた――のだが。

「……………やりにくくない？」

「そう？」

妹はベッドにうつ伏せになり、ノートを開いている。シャープペ

ンを握り、教科書から見てとった事を分かりやすくノートにまとめている。

（そもそも、それは“勉強”というよりも“まとめ”ているだけなのでは？）

「別にいいなら良いけど……」

一抹の不安を覚える。

だいたい、その体勢から連想する事と言えば。

「寝ないでね」

「んー、大丈夫だよ」

心配だ。むしろ危険な予感がする。その体勢を取り、なおかつ眠くなる勉強をしているこの状況。寝ない方が不思議だ。

厄介な事にならなければ良いのだが。

「起きろ！ メシだ！」

「おーい、起きろー」

案の定、妹はベッドの上で眠っていた。分かりきっていてわざとやっているのでは、などと妙な邪推をしてしまうのは、いた仕方ない事だろう。

それよりも今現在、もっばらの不安は私の隣の人物である。

「おい！ 起きろ！」

妹を殴りそうな勢いを持つ、兄だ。いや、実際は叩く程度で起きてくれる程、可愛い妹ではない。

「おーい、起きろー」

私自身は諦めているので適当に手を抜いている。しかし、兄の執念は深い。

「さっさと起きろって言ってるだろ！」

危険信号が出ている気がする。

「もう諦めたら。どうせ起きないだろうし」

兄は胡乱うごんな視線を妹に向けた。舌打ちをして台所へと向かっていく。私もそれに続いた。

「お母さん。起きないよー」

一応、母に報告する。母は私に呆れたような視線を投げた。

（いや、私の所為じゃないし）

思わず回避行動に走る。

「まあ、寝ながら勉強してたから仕方ないんだよね」

嘘じゃないし。

すると母は怒りも露わに妹の部屋へと向かっていく。

（どんまい）

しばらくして母の怒鳴り声が響いてきた。

「いい加減に起きなさい！」

妹は身体をびくつ、と竦すくませて目を覚ます。

「むあ……」

「勉強するなら机でやりなさいって言ってるでしょ！」

始まった。

台所まで響いてくる声により、兄は一気に不機嫌になる。

知ーらない。

我が家の妹の勉強法はあまり良くない事が判明しました。

まあ、成績見れば一目瞭然だしね。

勉強法には注意する必要がある事が分かりました。

……なんか今日は珍しくまともに観察したな。

妹さまの勉強法（後書き）

ちなみに作者はテスト直前と前日のみ勉強します（全然頭に入らないから……）。

妹さまの朝

朝。それは一日の始まりを示すための合図でもある。

朝日を浴びて爽やかに目を覚まし、「今日も一日、頑張ろう」と気合を入れる（別に入れなくても可）のが、普通だろう。

しかし、やはり朝が苦手な人も多い。それは体質的なものもあるだろう。それでも朝は起きなければならない（昼まで寝ている時があるのは、ご愛嬌）。

さて、問題。

我が家で一番、朝が弱いのはだーれだ。

*月*日

眠い。ただひたすら眠い。

その原因となる人物を、私は見下ろす。その人物は気持ち良さそうに眠っていらっしやる。私は思わず怒りを覚えた。舌打ちをしそうになるのを堪える。

「おらあ、起きろ！」

私は妹を足で揺する。蹴りたいのだが、そこは自制心をもって抑える。ちなみに、手で揺するのと同じくらいの強さだ。

妹は変わらず、気持ち良さそうに眠っている。その事に私は更に怒りを覚えた。

「おい！ いい加減に起きろって」

妹の耳元で思い切り怒鳴る。妹は身動きをするだけで、起きる気配はない。思わず舌打ちを打つ。それに反応するかのように、妹の携帯の目覚ましが大音量で鳴った。私はそれを忌々しげに見つめる。

この携帯の目覚ましがすべての元凶だった。

——折ってやろうか。

それは非常に良い考えに思える。しかし折った後に起こるであろう、諸々の事を考えて断念するしかなかった。

妹さまは非常に寝汚い。^{いきたな}それは怒りを覚えるほどに。理由は簡単、携帯の目覚ましを起きる時間よりも三十分早く仕掛ける事にある。

え、それだけ？　と思うなかれ！

私のベッドは二段ベッドである。そして、下の段には妹がいた（重要）。

つまり、私は毎朝毎朝、妹の目覚ましに起こされる訳である。本来起きるつもりがなかった時間に。

それで妹がすぐに起きて目覚ましを消してくれるのであれば、私はここまで怒らない。だが、この妹は一回目の目覚ましでは決して起きない。つまり、そのまま鳴りっぱなしで放置しているのだ。——ちなみに、これはまだ序の口。

妹は自分がすぐに起きない事を理解してか、十分置きに仕掛けていたのだ。これの意味する事を理解してもらえるだろうか。

つまり十分毎に、私は毎回起こされるのである。大音量の携帯の目覚ましによつて。

しかも妹は起きない。ちなみに、三十分経つても起きる事は稀だ。繰り返し鳴るように設定されているので、何回も何回も何回も、鳴る。それこそ嫌がらせか、と訝しんでしまうほどに。

そこまで思い至り、私は微笑みを浮かべた。

「そうか、なるほど。君は、私に嫌がらせをするためだけに、毎朝、携帯を鳴らすのかな？」

にやり、と意地の悪そうな笑みが浮かぶ事を自覚する。今の私に自重という言葉は遠く彼方^{かなた}にあった。

「私が、予定よりも早い時間に起こされると怒り狂うと知って、行^{おこな}っているのか。なるほど」

予定よりも早い時間に起こされた私は、普段よりも思考回路がぶっ飛んでいる。自分でも酷いと後から後悔するほどだ。しかも容赦ない。

私は妹の背を思いつきり叩く。そこに手加減など存在しない。

「いい加減に起きろ！」

何度か叩いて、ようやく妹は目を開ける（寝ている間に強盗が入っても、絶対に起きないな）。

「さっさと起きろ。携帯折るぞ」

私は妹の携帯を開き、逆の方向へ折り曲げる。しかし妹はすぐに目を閉じた。

「好きにすれば」

その言葉に頭に血が上る。携帯を妹の耳の上に置く（耳元で目覚ましが鳴っても、妹は起きないが、希望を捨ててはいけない）。折るつもりは最初からなかった。時々、冷静に判断してしまう自分が憎くなる。しかし、私は諦めが悪い。

朝から血行のを良くしてくれて、ありがとう。お礼として、素晴

らしい者を召喚して進ぜよう。

心の中で嗤いながら呟く。私は妹に背を向け、部屋を後にする。
両親の寝室に向かい、母を起こす。

「あいつが起きん」

代名詞で通用する。母も分かったのだろう。顔が見る間に歪んでいく。そして足音を立てて、妹の元へと向かう。後を追うと、妹に怒鳴る母の姿が見えた。

「いい加減に起きなさい！」

私に何度も起こされた所為か、すぐに「あと少し」と間延びした反応が返ってくる。

この言葉に母は更に怒鳴りつけた。

「今日は早く起きないと遅刻するって言ってたでしょ!？」

妹はその言葉にようやく起き上がる。そして母を見つめた。

「送ってって？」

私は呆れた視線を妹に投げる。

母は大きく溜息を吐きながら「何時までに行くの?」と、遠回しながらも了承した。妹に甘い母である。

余談だが、こうして妹を起こした日は兄の機嫌が非常に悪い。そんな兄に会わないために、私は時間ぎりぎりまで寝る羽目になった

の
だ
っ
た。

妹さまの朝（後書き）

身近にいたら、すごく嫌だな……。

妹さまと漫画（前書き）

なぜか長くなってしまいました。

妹さまと漫画

物語と一言にいつても、様々なものがある。

例えば冒険、ファンタジー、恋愛、SF、伝記…… などなど。人によつて好きなジャンルはあるだろうし、逆に苦手なジャンルも存在する。好みの問題もあるため、そこは特に言及する気はない。

しかし漫画に対する態度は、かなりの温度差が生じる。

ある人はくだらないと馬鹿にし、ある人は寝る間も惜しんで読んでいる。人の価値観はそれぞれだ。だけど、人の趣味って思わず突っ込みたくなるよね？

*月*日

今日は欲しい漫画の発売日、とかは関係なく私は週に三回ほど本屋に行く。そこで本を物色し「あ、これ絵が好み」、「これ面白そう」など、いかにも軽い理由から本を買う。お陰で私の貯金は尽きようとしているが、そこは気にしない。

話は変わるが、母は漫画が好きだ。特に例の物が。週に六冊は最低でも購入している。

まあ、それは置いておいて。

我が家で本を購入するのは私と母だけだ。兄は雑誌の立ち読みで済ませるし、父の小遣いは多くない。妹にいたっては花より団子（少し違う）であつて、本を買うならお菓子をかう。

だが妹は、本来の持ち主である母よりも、家にある漫画の配置を熟知している。その姿は見ていて思わず引くほどだ。

ある時では――

「ねえ、この漫画の続きってどこにあつたっけ？」

「それはお母さんの部屋の棚にあつたよ。たしか三段目くらい」

「そっか、ありがとう」

私は妹に礼を言い、早速探しに行く。果たして目的の物はそこにあった。

また、ある時では――

「あの漫画、久しぶりに読みたいけど、どこにあるのか分かんないんだよね」

「あーあれは倉庫（いわゆる開かず部屋）の箱にしまってたよ。お前はそんな所までわざわざ探しに行ったのか。」

「……そっか、ありがとう」

私は妹に礼を言い、早速探しに行く。果たして目的の物はそこにあった。

こんな事がよくあるのだ。ちなみに、内容もよく覚えていたりする。

「そういえば、あの漫画の内容ってどんなのだったけ？」

ふと、内容を思い出そうとして思い出せなかったのだ。

「あれは主人公が異世界に飛ばされちゃってどうしよう、って話だよ。結局帰れなかったはずだけど」

「ああ、そういえばそうだった気がする。久しぶりに読もうかな」「そうしたら？」

「この絵ってどこかで見た事があるような……」

「ああ。それってアレでしょ？ 確かこの漫画の人の絵に似てたよ。妹は漫画を探し、私に見せる。確かに絵の癖が似ていた。」

「あ、本当だ」

そもそも、よく覚えていたな。これ小学生くらいに読んだのじゃなかったっけ？

などなど、異様なまでの記憶力を発揮する。その記憶力を勉強に使えよ、と言われても仕方のないことだろう。しかも、情熱のかけ方が少し変。

妹はベッドの上で寝転がって本を読んでいた。

「なに読んでんの？」

妹は本の表紙を見せる。

「これ面白いんだよね」

「ふーん」

私は気のない返事をする。妹も対して返事は期待していなかったせいか、すぐに漫画を読むのに没頭した。

次の日。妹はまだそれを読んでいた。ベッドに持ち込んですらいる。しかも読んだまま寝てしまっただけで、本がぐちゃぐちゃになっていた。

「……………」

まあ、これは普通の人でも良くあることだろう。

また、別の日では。

「……………なに読んでんの」

妹は普段は見せない素早い動きで、読んでいた本を敷布団の下に隠す。妹の振り返る顔がにやけていた。

怪し過ぎる。

「はい。出す」

妹は顔を逸らした。そして隠していた本を取り出す。私はその本を受け取り、妹を見下ろした。

「……………お前さあ、バレバレだった」

差し出された本は、全くの別物だった。しかも先程の漫画とは全くジャンルが違っただろう。表紙の色も違うし。カモフラージュするなら、せめて色を似せる。

「……てへっ」
「てへっ、じゃなくて」

私は妹の敷布団を勢い良く捲った。私は思わず溜息を吐く。そこには先程隠した本とは別に、二冊ほど隠されていたのだ。つまり合計三冊。もちろん、例の本である。

「……お母さんは一応、高校卒業したら読んでいいって言ってたはずだけど？」
「……………」

妹は目を逸らして答えない。
私は再び溜息を吐いたのだった。

「これ、そんなに好きなの？」
「いや……だって、気になるじゃん。そこにあると読みたくなるよね」

言い訳が見苦しい。
「ならねえよ」

思わず即答で切って捨てる。堂々としてるならそこまで言わないが、女々しいのは嫌いだ。だいたい、気になるのであれば一冊パラ読みすれば、なんとなく内容は察する。しかも表紙から内容が、なんとなく想像つくだろう。

「没収」
そして母の寢床に戻す。

これで終わりかと思えば、そうではない。
妹は何回も何回も懲りずにこれを繰り返すのであった。

……毎回返す身にもなってくれ。

妹さまと漫画（後書き）

しかも長いくせに内容薄くてすみません。

妹さまとワードソフト

パソコンのキーを打つ事をタイピングと呼ぶ。タイピングの技術は独学で学ぶ人もいれば、専用のソフトで学ぶ人もいる。インターネット上にもタイピングを学ぶためのサイトは多くある。

しかし、インターネット上ではキーワードを入力してマウス操作で探するのが普通だ。キーワードを入力するくらいであれば、指一本でも対して不自由はない。よって、インターネットを頻繁に利用し、ワードソフトをあまり使わない人にとっては「タイピングって何？」から始まる事が多かったりする。

＊月＊日

我が家のパソコンは共同利用である。

久しぶりにパソコンでインターネットを使おうと思っていたら、妹に先を越されていた。軽く落胆したが、しばらくしたら空く事は分かっているの、とりあえず何をしているのか覗く事にした。

妹はワードソフトで文書を作成していた。学校の課題が宿題の類たぐいだろうと推測する。しかし――

「おっそ」

突っ込まずにはいられない。

妹は左右の指一本（時折、他の指と連携）でタイピングしていた。私もそんな時期があったな、などと考えながら眺めている。しかしだんだん亀のような速さに辟易へきえきしてきた。

「代わりに打ってあげようか？ 五百文字、百円で」
「やだ」

速攻で拒否される。確かに、私なら拒否するね。

しかし実際問題、遅いのも事実。これでは私がパソコンをいつ使う事ができるか分からないではないか。できれば私の提案を受けてほしかったが、仕方ない。すぐく使いたい訳でもなかったなので、放置しておくことにした。

——一時間後

妹はまだワードを打っていた。どうやら感想文のようなものを書いているようだ。

（しかし……ネットで拾った文書をそのまま手で打って……引用したいのは分かるけど、コピペ（コピー＆ペーストの略）すればいいのに）

私は思わず呆れて妹を見たが、妹は必至で書き写す（打ち代えて）いる。

（なんか、哀れ……）

私自身、コピペというものは友人に教えてもらったのだ。私は大学に入るまでパソコンは全く触れなかったから、そういった技術はかなり疎かった。「こんな事も知らないの!？」という目を向けられながら、私は頑張ったのである。

「コピペしないの?」

私は妹に聞いてみた。妹は画面から顔を上げ、私を見上げる。

「コピペってなーに?」

やっぱりそこからか!

「コピペっていうのはコピー＆ペーストの事。コピーしたい文書をドラック……マウスで範囲選択して、それを右クリックすると“コ

ピー”が出てくるでしょ？ それを選択して、ワードの方に貼り付け。それで、書式……文字の種類とかね。それが違うから、この文書の最後に絵があるでしょ？ その横に付いてる矢印みたいなものをクリック。そこから“貼り付け先の書式に合わせる”を押すと……あらあら不思議、書式が揃いましたとさ。おしまい」

描写は割愛。なぜならそのままだから。しかし、そこまで専門的な用語ではない部分まで不思議そうな顔をしないでくれ。雰囲気で察しろよ。お陰で説明がやたらと長くなってしまったではないか。私は長つたらしく説明するのも、されるのも大嫌いなんだよ。

妹は大袈裟に「おおっ」と驚いている。私も初めて見た時は、同じような反応をした。これが未知の知識と遭遇そうぐうした場合の一般の反応なのか、それとも姉妹だけの特殊な反応なのか判断がつかないのが残念だ（外見は似てないけど、性格は似ているとよく言われるため。私はここまで間抜けではないと思う）。……別に共通点を探している訳ではないのだが、似ていると言われると癪しゃくに障る。

「これで少しは早く終われるでしょ。終わったら次、貸してね」
「うん。わかったー」

妹は気のない返事をして作業を進める。しかし、しばらくして――

「お姉ちゃん」

呼ばれました。なんだか嫌な予感しかないのはなぜだろう。――
応、呼ばれたので近くまで行く。

「なに？」

「これさあ、場所がずれたままなんだよね。どうすればいい？」

「……………」

文字列の頭を揃える方法。

私の苦手な所だった。ここはちゃんと覚えていない。一括で列を揃える方法は知っているが、「ぶら下げインデント」だっただろうか。それは非常に苦手なのだ。「お前はついて来なくていいんだって！」などと一人で突っ込みながら作業をしている様は、傍^{はた}から見てもさぞかし奇妙な光景だったろう、と内心で考え込んでしまった。

案の定、色々と動かしてみたが妹さまはお気に召さない様子。私は最終手段に出る事にした。

私は妹の側^{そば}から離れ、棚に向かう。そこから一冊の本を抜きだした。

「読め」

「は？」

「教科書だから」

私は妹にワードソフトについて書かれた教科書を差し出す。windows 2003について書かれたものだが、2007でも対応できるだろうと判断する。

「やだ」

私は教科書を捲^{めく}り、インデントについて書かれたページを開いた。「ほら、この通りにやればできるから」

妹は渋々ながらも教科書を受け取り、作業を続ける。

待つこと三時間――

「終わったー！ お姉ちゃん、パソコン使っ？」

ようやく終わっただろう。その頃には、もうパソコンを使う気は

なくなっている。

「いや、いい」

「ふーん。じゃあ、消すね」

「おー」

妹はパソコンの電源を落とした。

妹さまとワードソフト（後書き）

慣れれば楽。慣れるまでが大変。ちなみにここではwindow
s 2007について書いています。

日記のおわりに

「……けっこう、書いたな」

ベッドの上で寝ながら、私はこれまでの日記を読み返し、そう評した。

「しかし、まったく中身のない内容だ。どこが面白かったんだろう。そもそも、普段見慣れている妹を観察した所で、新発見なんてないしな」

よくまあ、ここまで書いたものだ。

私は呆れ交じりにこれまでの自分を評価する。

「そうとう暇人だったんだな……私って……」

妹を観察し、それを記録した日記。しかし他の人から見ても面白いと感じる物であっても、自分がそう感じるとは限らない。所詮は他の人から見た評価、という事だ。これを身を持って知っただけでも、やった価値はあるか。

「絶対、面白いと思っただけだな。皆「お前の家族は面白い」って言っくらいだから観察したってのに……あーあ」

期待外れだ。

しかしこの日記、どうしたものか。

私は日記のページを適当にめくりながら考え込む。

「捨てるのもなあ、まだページたくさん残ってるし。ああ、書いたページだけ捨てればいいのか」

日記帳なんて洒落た物ではない。ただのメモ帳に適当にそのまま書いただけ。

「予想通り、すぐに飽きた。まあ、そこそこ持った方だけど振り返ったのが間違いか」

振り返らなければ、暇潰しにもっと書いていたのかも知れない。だとしても、近い内に飽きただろうが。

「暇だな」

バイトしろ、という母の言葉は常に右から左へ受け流している。

「なんか面白い事ないかな」

さて、これからどうしたものか。

ベッドの上でそんな事を考えていると、兄の「メシ」という言葉が聞こえてきた。

とりあえず、ご飯を食べよう。日記は別にその辺に突っ込んでけば問題ない。

「はいはい」

私はいつものように台所へと向かった。

日記のおわりに（後書き）

ここで本編は一応、完結となります。

番外編として、今度は姉が観察対象となっていく予定です。

ここまでお付き合いしてくださった方々、ありがとうございます。
た。

番外その二、我が家の姉。（前書き）

久しぶりに書きました。かなり短いです。

番外その二、我が家の姉。

あたしのお姉ちゃんは横暴だ。身勝手だ。自分勝手だ。

「なに」

そんな事を思っていると横目で見られた。だが意識は画面のゲームに集中している。表情は動かないせいか、とても怖い。

「ゲーム……やりたいな、って思ってた」

「何時くらいに？」

姉は時間を重んじる。時間通りに動かないとストレスを感じるらしい。

「えっと……四時くらい？」

姉は時計を見上げた。

ただ今の時刻は三時四三分。

「だめ」

即答でした。

「えー！」

抗議の声を上げると、姉は大きく溜息をつく。そして何かを思いついた様でにやり、と笑った。

「お皿洗ってくれるなら良いよ」

姉は流し台を示す。あたしはうつ、と唸った。

「えー……」

「なに？ ゲームしたくないの？」

別に私はそれでもいいよ、と姉はゲームを続けている。

あたしは心の中で相談を始めた。

（お姉ちゃんは、なんだかんだで言った事は守るよ）

（でも皿洗ってまで、したくないな……）

（だけど、やりたい）

（後で洗うって条件なら代わってくれるかな？）

その事を姉に伝える。

「だめ。そんな事、言ったってどうせ洗わないだろうから。代わってほしいなら今、洗って」

横暴だー！ 断固、抗議する！

だが、そんな事を言った所で「なら別に自分で洗うから良いよ」というのだろう。目に見えている！ こいつはそういう奴だ……ん？

「ねえ、お姉ちゃん。あたしが洗わなかったら、お姉ちゃんが洗ってたの？」

「だって今日は私が当番の日でしょ」

……だから交換条件になりえるわけか。

姉はどこまでも無駄^{はぶ}を省く。自分が動かないためなら手間を惜しまない（結局、それって動く事になるのかな？）。

「いいよ。やるよ」

「えっ、ほんと？ ありがとうー」

姉は笑顔で礼を言ってきた。だが心はこもっていない。楽でできてラッキーとしか思っていないだろう。

しかし皿を洗い始めると、姉はゲームを終わらせて部屋へと退散した。

こういう所はフェアなんだよね。意地は悪いけど。

番外その二、我が家の姉。(後書き)

また気が向いた時に書きます。

番外その三、我が家の兄。（前書き）

久しぶりに投稿しました。

番外その三、我が家の兄。

妹の観察も飽きてしまった今日この頃。

私はベッドの上でごろごろ転がり、食っては寝るの休日過ごしている。

暇だ。

それなら外に遊びに行けば、と思う人もいるだろう。しかし、私にとってはそれも億劫だ。別に引きこもりではない……と思いたいが、どうだろう。

よし。暇だから、ゲームでもするか。

私は台所へと向かう。そこには先客がいた。

「……先を越された」

テレビとゲーム機本体は、現在兄が使用中。そして、兄は格闘ゲームをしていた。

最近の格闘ゲームはキャラクターがCGっぽく描かれている。格闘ゲームでわざわざリアルにする必要はあるのだろうか、と思ってしまう私はRPGが大好きだ。といっても、あるシリーズしかやってないが。

「……なんで格闘ゲームのキャラって、スカート短いんだろうね」

多分、中にはスパッツをはいているだろうけど、なんとも言いえない気分になる。

「知るか」

兄の答えは単純明快。確かに、そんな事聞かれても困るな。暇な私はゲームを観戦する事にした。

……なんだろう。男性キャラの筋肉が、ありえないくらいムキムキなんだが？ お相撲さんまで筋肉ムキムキとは何事？

「こんな不用意に筋肉ムキムキにする意味はあるの？」
「さあな。そもそも筋肉の付き方がおかしいと思う」

私は筋肉に対して詳しくない。そんな事を言われても「ふーん」くらいしか言えない。

「そーなんだー……」
思わず生返事。

別に兄も答えを期待していなかったようだ。

兄が終わるまで観戦を続ける。私はその間、思わず突っ込みを入れてしまう。

「こいつら、すごい高さまで跳ぶな。どんな筋肉してんの？ 本当に人間？」

「燃えてんのに何で平気で立ち上がれんの？ おかしくない？」

そんな事突っ込みながら見てみると、兄はゲームを止めてしまった。

「あれ？ もうやめんの？」
「飽きた」

「あ、電源消さないで。私、ゲームするから」

電源を消そうとしていた兄を止める。兄は入っていたソフトを取り出し、私は自分のソフトを本体の中に入れた。

「さて、やるとしますか」

ちなみにオープニングのアニメーションを毎回見てから始める。なぜなら、アニメーションが綺麗だから。

ゲームを開始し、続きから始める。

敵が現れた。

ちなみに、このゲームはターン制ではない。リアルタイムでキャラを動かすシステムだ。格闘ゲームに似た要素がある。だが複雑なコマンドがないため、非常に楽だ。

「来たー」

戦闘が開始し、私は早速敵に向かって突っ込む……が。

「あ、囲まれた！　ちょ、待ち！　あ、ちょい誰か助けるよ。よしっ、ナイスフォロー！」

「……………」

「いけ、そこだ！　これでも喰らえ！」

「……………うるさい」

「いやー、なんかテンション上がるじゃん？　声が良いからなお、テンションが上がるんだよねー」

兄は部屋へと戻って行った。

こうして私はゲームに熱中していくのであった。

あれ？ 兄を観察してないや。ま、いいよねー。

番外その三、我が家の兄。（後書き）

このお話はこれで完結とさせていただきます。
微妙な終わり方ですが、ここまで読んでくださった方々に感謝します。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9193v/>

我が家の妹。

2011年10月9日16時40分発行